

ツの寒性針葉樹林となり、北欧やカナダの森林に以た異国的景観が拡がり、内地でも高山地帯となると、これに以たシリビソ・アヲモリトドマツ等の森林となり、その下木にはシヤクナゲも見られ、又各地方の裸地ではカラマツやカバ類の闊葉樹がこれに代る。更にその上方高地になると、登山者あこがれのハイマツその他の灌木叢が現われ、やがてお花畠と呼ばれる高山植物の群落が、艶麗な景観を展開する。こうした植物区系は地形地質により又地史的にも特異なるものがあり、地方によりそれぞれ変異があるので、一層興味深いものとなる。しかしこうした植生も林業・牧畜・開墾等人為により破壊され、その原始型をよく保存するものは極めて少なく、従つて偶々これを保存するものがあれば、それは学術上貴重であるばかりでなく、一般人も、観察観照のために利用して珍重されるのである。

日本の動物区系も地史的に自ら決まつてゐるが、森林型・草地型・水辺型と大別され、哺乳動物の種類は著るしく減少し、その棲息地も局限されて、高山又は海岸の岩峯、断崖又は原始林等にたまたま、クマ・サル・シカ・カモシカ・オコジョ・イノシシ・ウサギ等が見られるのみである。鳥類はいたる所かなり豊富で、高山型のライチョウ・イワヒバリ・カヤクグリ・ホシガラス等が注意され、水辺型に属するものとしては、ウ・カモ類・オシドリの水禽類が目立ち、サギは沼沢地・水田等に普通であり、ツル・ハクチヨウは土地を限つて渡來する。季節に応じて鳴虫の出現する現象も、また景観上ではかなり重要な現象である。

かく風景の型式を決定する要素を一應拾いあげたわけであるが、この組合せから、無数の型式が抽出出来るので、極端にいえば、あらゆる風景地がそれぞれ特殊な型式をもつようにならざることになる。殊にこの自然景観要素に人文要素を加える場合は、なおさらである。そこで風景型式の分類はなるべく地形地質・生物等の大分類により、單純なものとすることが肝腎である。この際地理的位置について考慮することは、それが政治的な見解を加味された場合を除けば、決して意味のないこととも理解される。こうして風景型式により選定上最初の篩をかけた上で、次には第二の條件である「自然の風景地で地域が広大であること」に照らして検討される。既に述べた通り、日本の国土はよく開拓されていて、自然の破壊されたものが多いのであるが、急峻な高山や渓谷、或は海岸地帯等には産業上利用に適しないもの、或は国土保安上保護される必要のあるもの等で、かなりまとまつた原始的乃至自然的景観地

も残されている。しかしその範囲は、第一の條件で決められる特定の風景型式が支配する領域に限られるのであるから、自然の風景地であつても、それが二つ以上の型式の地域に跨るのは成るべく避けたい。

なお現在自然の破壊されているものでも、これを復原しうる可能性があれば、これを区域に編入することは差支ないであらう。次に第三の「景観が雄大であるか変化に富んで美しいこと」という條件であるが、これは一種の注釈的なもので、風景型式を代表して傑出するものであれば、それは山地にしても海岸にしても、量的に雄大であるものが多いたが、しかし中には風景要素の密度が大きくて、変化のある点で傑出しているものもある。日光などがそれで、山岳・高原・湿原・湖沼・瀑布等では、尾瀬原の湿原地形を除いては、日本一といわれる何物もないのが、このように風景の密度の大きい風景は、世界的にも珍らしい。そしてこの纖細優美な風景が、概して日本的な性格でもある。瀬戸内海にても、単に島が多いという点では、朝鮮の西南海岸の方が優れており、島嶼の密度の高い点では九十九島の方が優つてゐる。しかし地形・地質の変化に富んでゐる点で傑出するといえよう。霧島もやはりそうした特徴で優れた火山といえるであらう。又箱根や大山や雲仙や霧島等は、区域内の地形が優れているだけではなく、その山上から四周の展望が傑出している点を勘定に入れる必要がある。

国立公園選定標準の二、として「自然環境が保健的であつて多数人の利用に適すること」があげられ、(一)気候・土地・水等の自然要素が保健的であることと、(二)探勝・登山・舟遊・温泉浴・休泊等につき多数人の利用に適することの二項に分けてある。これは国立公園のレクリエーションの利用を保障する條項で、単に風景が傑出しているばかりでなく、それは区域内で野外生活を享受するために、その自然的環境が保健的であることと、利用方法が多方面で、しかも多数人を收容しうることを要する條件と見られる。水は時として火山の山地や島嶼では不充分で、そのため公園として大きな欠点となる場合がある。降水量の多い地方では天水を利用しても間に合うこともある。又わが国では到る處、温泉が豊富であるから、これのないことが、大きな欠点となることもある。又山地や海岸では、平坦地に乏しくて、一時に多数人を收容出来ないで、大きな欠陥となることもある。秩父多摩なども、深い渓谷と急峻な山峯でなり立ち、平坦地に乏しいことが欠点と見られる。例えば、伊豆七島は水に乏しく、但馬海岸や渭南海岸も平坦地

に乏しい欠点があげられよう。

第三の條件として国民の教化に資する資料に富んでいること、即ち(一)珍らしい地形・地質・動植物・気象等の自然要素に富んでいて国民の自然観察と研究、又は観照等に好都合な資料が豊富であることと、(二)史跡・遺跡・特殊建造物等の文化要素を含んでいることで、これは自然物と同様新たに人為で造成することの出来ない国民の文化財であつて、国民教化上貴重なものと考えられる。社寺等は景勝地に多く、人工物ではあるが、利用上重要な対象となつてゐる。歴史の古い日本の国立公園には、ありたいものである。

第四の條件は土地の所有關係と産業關係とが国立公園の設定上に支障を來さないことで、(一)土地の所有が主として国有又は公有で、公衆が区域に立ち入つて自由に使用出来るような公開的なものであり、宿泊休養施設を行うにも便宜の多いことと、自然保護のために、ある程度の土地利用上制限を加えても支障の少いこととのために、この所有關係は重要である。しかし多くの場合、国立公園は道路に従つて利用されるものであるから、必ずしも立ち入つて利用することを必要としないから、結局は風致維持や自然保存のために必要な條件と見られる。そこで(二)もし私有地であれば、土地所有者が国立公園の設置運営に協力的でさえあれば、絶対に自然保護を必要とする地区の外は、大して支障は起らないことになる。しかし最も困難な場合は(三)水力電気・農業・林業・牧畜・水産・鉱業等各種の産業の開発による支障の少ないという條件である。風景の優れている地方に、屢々水力電気事業が計画され、堰堤や、発電所や、送電線が出来、渓谷の原始景観を破壊するばかりでなく、流水を調制して溪流や瀑布を涸らしたり、人工の貯水池が出来、しかも水位が上下して、季節により醜惡な湖畔を露出するといつた具合で、この種の自然破壊ほど徹底的なものはなく、殆ど自然保護とは両立し難いものとなる。従つてこの種の事業の計画されないもの、例えは溪流のない富士山とか阿蘇山とかは安心であり、海洋の火山島なども多くは安全であるが、湖沼や渓流や瀑布等の多い山地が最も危険で、尾瀬原や、黒部峡谷や北山川等で、国立公園の生命線を嚇やかすほどの問題が起るのである。鉱業も亦重大な問題を起す可能性がある。採掘そのものが自然破壊であるばかりでなく、従業員宿舎、索道又は軌道、精錬所とその鉱毒等で、これ亦広大な地域の自然を損壊することになる。農業のための開墾も亦これに劣らぬ損傷を与えるし、林業

も施業方法によつては相当な被害を与える。土地産業のうちで牧畜と水産との影響は最も軽微であり、時としては却つて好ましい風景を造り、公園利用上にも有利となる場合がある。しかし海外の国立公園では、放牧を禁止したり制限したりするのは普通である。この点、日本の国立公園では、もともと文化景観を伴つており、瀬戸内海のようにかなり、人文景観が支配的となつてゐるものもあるので、農林業さえ、場所によりさほど気にならぬことさえある。

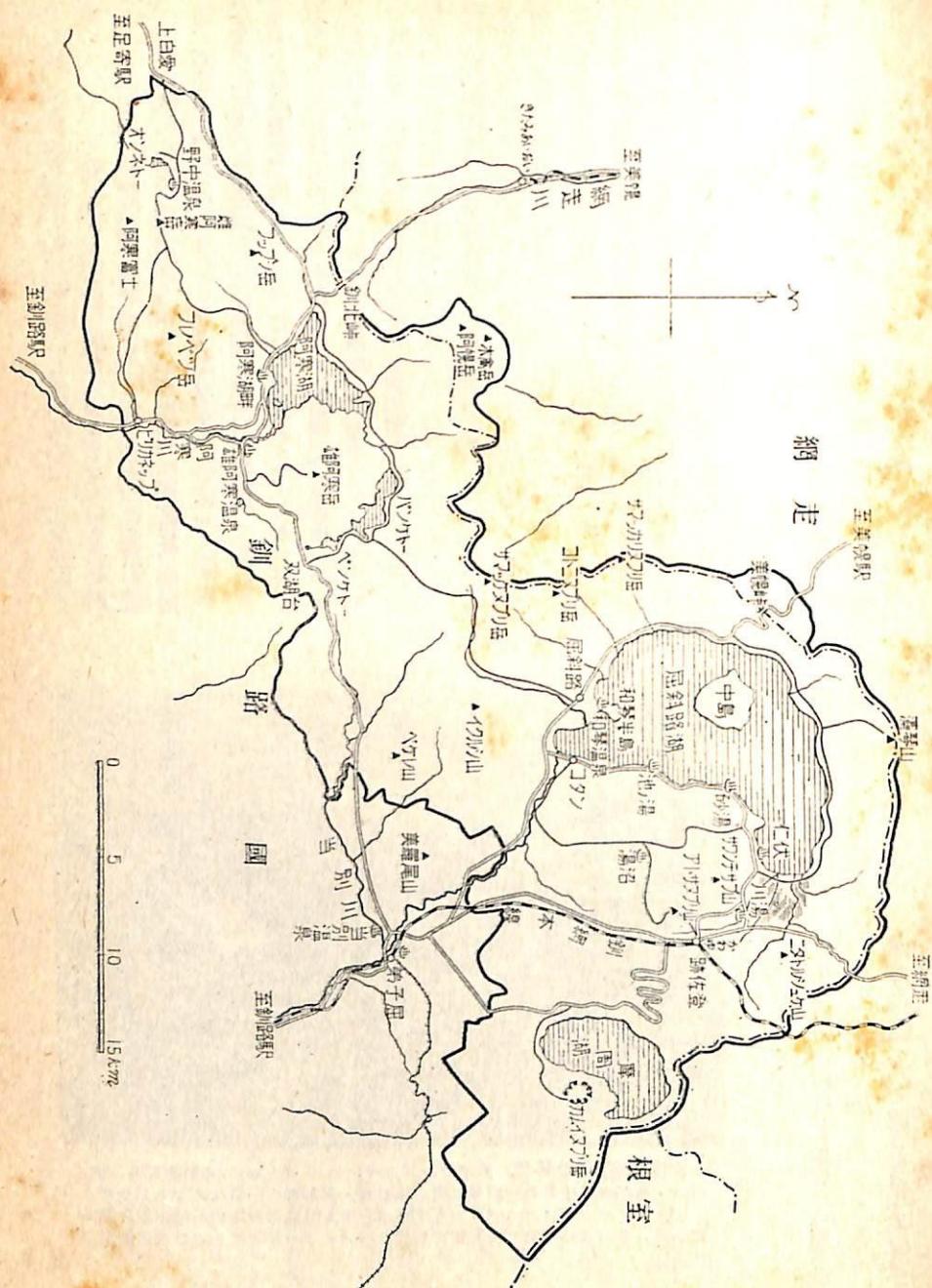
以上説明する通りの国立公園選定標準によつて、景勝地のうちから、條件にかなつたものを選出するとすれば、それが一般觀光地とどんなに違つたものとなるかが判る。従つて国立公園は必ずしも日本風景を代表するものではなく、觀光地の第一流のものを網羅したものでもなく、特殊な條件で選定される大自然公園であることが諒解されると思う。觀光地として国立公園の看板を掲げなくては、肩身が狭いなどと考へるのは、大きな誤解であるといわねばならぬ。又国立公園の分布の公平を期しようとすることも、それほどいわれのあるものでないことも理解されよう。

ここで国立公園増設問題について一言することとしよう。既設の国立公園に比べても遜色のないものが他に残されているかどうか。その風景型式に於ても、別個のものがあるかどうかの点で、検討されるわけである。一般論として、火山の風景地はこれまでによく漁られて來ているので、遺すものはあまりないようであるが、なお温泉現象の頭著な八幡平など注意されるものもある。火山島としては、世界的なスケールの点でも、吟味されてよいと思われるのに、伊豆七島や鹿児島の硫黄島、口永良部島その他領土南端の火山島があり、又北では領土北端の利尻島があつて、風景型式に於て、これまで選定されたもののうちになく、景観としても相当のものがあることは、注意されねばならぬ。又堆積岩の国立公園は山地としてもその数が少いので、南アルプスや石槌山なども一応検討されるべきである。又海岸風景としては太平洋岸では花崗岩と古生層及び中生層とよりなる三陸のリアス式海岸、これと似て、主等があつて、太平洋岸には有力なものが多いた。そして東支那海になると、外海と内海とを併せたような堆積岩と花崗岩と玄武岩の九十九島・平戸・五島があり日本海に廻ると花崗岩、玄武岩及び各種堆積岩の長門日本海、これと似て、安山岩を交える但馬因幡海岸、更に東に接する古生層と花崗岩と安山岩の若狭湾一帯等一群の日本海型の海岸風景が

ある。これら多数に上る景勝地を検討して、各種の選定標準を充足するものがあれば、国立公園として設定することにつき現に国立公園当局で検討されている。これ等の中あるものは国立公園として指定されるであろうが、その選に漏れたものは、現在のところで国定公園ということにならうが、これは主として地方的利用によつて選ばれるから、同一型式のものであつても、地方人により、よく利用されるものであればよいわけであるから、地方の風景のうちで国立公園の選定標準に準じて、その代表的なものを物色することになる。この種の公園で、多少全国的な興味を惹くに足るものがあれば、これを国定公園とし、そうでないものを純然たる地方公園とするというのが、一応合理的であるようと思われる。こうして国の自然公園体系が整備されるならば、国民の保健・休養・教化のための自然公園に対する要求は、完全に満されることになる。この場合でも、單なる観光地と自然公園とを混同しないようにしたい。ここで繰り返すようであるが、自然公園を設定するのは、保護さるべき自然景観があるためであつて、実のないものに名称だけをつけることは自然公園体系のためには迷惑なことである。

四 国立公園、国定公園の概要

指定 昭和9(1934)年12月4日
面積 87,498頃



この国立公園は北海道の東北部に位し、釧路の国と北見の國とに跨つてゐる。その区域は火山陥没地形（カルデラ）によつて構成された阿寒湖、屈斜路湖、摩周湖をはじめ大小多数の湖沼を配し、それに雌阿寒岳、硫黄山等の活火山のほか、阿寒富士、雄阿寒岳、蘿琴山、西別岳、カムイヌプリ等の火山が起伏し、雄大でしかも変化に富む地貌の大部分は寒性針葉樹の原始林に被われて、一大原始境を構成している。この森林はエゾマツ、トドマツを主とした天然林であるが、所によつては華麗なシャクナゲ、エゾイソツツジの大群落や、清楚な白樺林、平地のハイマツ林等を見せており、阿寒湖のマリモと共に、景観の美を誇ると同時に、自然研究に貴重な資料を提供している。

森林内動物には、北海道特有のヒグマを始め、大きなエゾリスやエゾユキウサギが棲息し、美しいシマリスや鳥類ではクマゲラやエゾヤマドリが見られる。

これ等の生物が、火山活動によつて構成された地表を装饰して地学的、生物学的、気象学的環境をかもし出し、総合された自然景観をなしてゐるのであるが、次に景観の纏まり上阿寒地帯（約二八、〇〇〇陌）と屈斜路摩周地帯（約五九、〇〇〇陌）とに分けて考察しよう。

阿寒地帶

火山・雄阿寒岳（一、三七一米）・雌阿寒岳（一五〇三米）・阿寒富士（一、四七六米）・ボツケ泥火山
湖水 阿寒湖・パンケトー・ベンケトー・太郎湖・次郎湖・オホ



双湖台附近の林相 双湖台からのベンケトー（上の湖）の遠望であるが、阿寒・屈斜路両地帯の分水嶺に近い双岳台・双湖台の一帯はアオトドやアカトド、エゾマツやアカエゾマツを主林木とする寒地性針葉樹が極盛相を呈している。なおこの写真で雄阿寒岳の裾がベンケトー湖を堰止めた点が観察される。

（ネトイ

温泉—阿寒湖畔（アルカリ性塩類泉C六四度）・雄阿寒温泉（鉄泉及硫黄泉C九九度）
雄阿寒岳（一三七一米）と雌阿寒岳（一五〇三米）とは、前者が

阿寒カルデラの中央火口丘として今では活動していないのに對し、後者は外輪山の西南部に後から生れた寄生火山で今なお活動しているという点で生い立ちが異つてゐる。雄阿寒の火山岩は二種の安山岩と南麓に分布してゐる泥礫岩である。雌阿寒岳は此の地帶の最高峰で、複雑な安山岩の截頭円錐火山で、山体はかなり大きく見えるが基底からの高さは僅か三〇〇メートルである。山頂には二つの接合した火口があり、東側の浅い方は噴出火口であるが、西側の深い火口は東側のものその後に出来た爆裂火口で、底には褐色の水を湛えて一般に赤沼と呼ばれている。又東側の火口底は爆裂火口が出来たときの碎片的な噴出物で被われ、平坦となりその東壁の近くに二つの小さなマール式の火口があるが一つは水を湛えて青沼と呼ばれている。他の一つは現在激しい硫氣活動を續け火口底に暗緑色の小沼をつくつてゐる。阿寒富士は標高一四七六メートル（錐状火山）であり、阿寒湖畔のボツケ泥火山は暗灰色の熱泥を噴出している小規模のものである。

阿寒湖はカルデラ湖が中央火口丘である雄阿寒の噴出によつて押し縮められた形になつてゐる。その際パンケトーやベンケトの湖が堰止湖として生れた。阿寒湖の表面は標高四一九メートルに相当しているが、最深部は三六六メートルであつて湖岸線は二六糠、面積は約一、三〇〇頃である。水色はフォーレル氏標準液の六程度で綠色湖に屬し、透明度は九メートルであるから摩周湖の世界一（四一・六メートル）に比べると遙かに及ばないが、水草の生育に適しその種類も多い。殊に一九二一年天然記念物に指定されたマリモは千島や樺

太を失なつた日本では唯一の産地である。この藻は緑藻類のシボグサ科に属する淡水藻であるが地理的分布は僅かにスウェーデン・デンマーク・ドイツ・イギリス等北欧の山間湖沼と千島樺太の一部に限られているもので、極めて貴重な存在である。マリモは阿寒湖では北端の湖岸に近い比較的浅いところに密集している。沈水植物で、船から箱眼鏡で覗くと湖水が澄んだときには美しい緑色のビロウドの毬がゴロゴロと転がつてゐる奇觀がみられて興味が深い。

北端の湖岸に近い浅いところのものは比較的小さなものが多いが、水深二——四メートルのところに大きなものが密集している。

高山植物は阿寒火山群中特に雌阿寒岳が優れており、阿寒富士と共に附近的山稜は寂漠荒涼の砂礫原であるが、コマクサ、メアカンスマ、メアカンキンバイ等が清楚可憐な姿を見せてゐる。しかもこの三種は阿寒国立公園中でも他所では見られないものであつて、この外にコイワタデ・ウラジロタデ・ミネズオウ・コメバツガザクラ等もある。

雄阿寒岳頂上に近い旧爆裂火口の御鉢平には、寒原状の御花畠があつてミネヤナギ・エゾノマルバシモツケ・チシマニンジン・イワウメ・チシマヒヨウタンボク等がある。

屈斜路摩周地帶

火山アトサヌブリ（硫黃山）（五一〇メートル）・カムイヌブリ（八五八メートル）・藻琴山（一、〇〇〇メートル）・西別岳（八〇〇メートル）

湖水・屈斜路湖・摩周湖

温泉一川湯（湧出量豊富、清澄、酸性熱泉）、池の湯（鉄泉）、

仁伏（アルカリ泉）和琴・赤湯・砂湯

アトサヌブリには大小數十の噴出口があつて今なお鳴音と白煙を伴つた活性火山現象が見られる。こ

ゝでは良質の硫黄が噴出口の周壁に昇華しているがその一部は採集をつゝけている。山麓一帯は坦々とした火山礫高原をなしシラカンバとハイマツを混じたエゾイソツツジの大群落でアトサヌブリの色彩豊かな山肌を背景として特色のある美しい景観を呈している。

火山性森林の初期にはミズナラ林やシラカンバ林の陽樹が発達するから美しいが、阿寒釣道や屈斜路東岸にはとりわけ美しいミズナラの林がある。これ等はしばしば純林となるが、こゝではシラカンバの疎林の中にエゾイソツツジが群生して、シラカンバーエゾイソツツジ林型とい

る。その下生えにはタチマンネンスギやゴゼンタチバナ、コケモモ等が見られる。又ミズナラの純林の下層はコザサが占め、時に



摩周湖 屈斜路カルデラの外輪山的存在である摩周湖は、一つの排水河も有しない純粋の火口湖である。世界一の透明度(41.6 m)を有し、湖心に青灰色安山岩の円頂丘神岩(カムイシユ島)が直立し、湖岸のオーレル氏標準液の三一四位の藍色湖に屬し、透明度は二〇米であるかも知れない。

屈斜路火口原に爽やかな山旅を感じさせ、ハイマツに埋もれるアトサヌブリやほのぼのと湯煙のあがる温泉に特異な植物景観を添えているのは、アカエゾマツの林である。これは阿寒の地帯でも見られるが、特に温泉湧出地帯に発達するもので川湯温泉附近が代表的とされ、亭々としたアカエゾマツ林の下草は、しばしばヤマドリゼンマイ、ゴゼンタチバナで占められ、これ等の群落

はヤマドリゼンマイ、エゾヤマハギが優占していることがある。

屈斜路湖は湖面の標高が一二一米であるが、最深部は二二五メートルあるので湖底は海水面下に達している訳である。その特徴として、湖底に湖錦と称する凹所が生じているのは珍しい。湖岸線は五六糠以上もあつて、長径一三糠、短径七糠にも及ぶ半月型火口原湖で、面積は約八、〇〇〇町である。水色はフオーレル氏標準液の三一四位の藍色

湖に属し、透明度は二〇米であるから可成り清澄である。
摩周湖は屈斜路カルデラの外輪山的存在である。湖底は海水面下に達している。湖岸線は五六糠以上もあつて、長径一三糠、短径七糠にも及ぶ半月型火口原湖で、面積は約八、〇〇〇町である。水色はフオーレル氏標準液の三一四位の藍色湖に属し、透明度は二〇米であるから可成り清澄である。
摩周湖は屈斜路外輪山の東端に近く噴出した摩周火山の火口で開始の初期相には低地でもハイマツが姿を見せている。

ある。湖面の標高三五一糸、長径七、五糸、短径六糸、湖岸線約二〇糸、面積一、九七七畝と云う半月型の純然たる火口湖であつて、流入河も排水河もない。最大深度二一一、五米平均二三八米の湖中に青灰色安山岩の円頂丘である神岩（カムイシユ島長径七〇糸、短径五〇糸、高さ二五米）が直立している。水色はフォーレルの二程度の藍色湖に属する実に世界一の清澄な湖水である。透明度四一、六米は一九三一年八月に北海道水産試験場によつて観測された数値で、当時まで世界一であつたバイカル湖の透明度四〇、五米（一九一一年六月ショスタコヴィツチ氏測定）に優るものである。

カムイヌプリは摩周湖岸に特色ある山貌を呈し、湖岸は二〇〇米から三五〇米に及ぶ火口壁の峻険な断崖で囲まれ特色のある原始湖は神秘な魅力を呈しているがその断崖や砂礫崩壊地にはミヤマオダマキ、イワキンバイ、チシマニンジン、タルマイソウ、チシマゼキショウ等がみられる。

西別岳は摩周火山群の東南部、この国立公園の東端に位するが、この山稜線の南側に発達したお花畑は実にすばらしく、屈斜路摩周山塊中最優秀の草原と言つて差支えなく、タカネヌカボ、チシマフウロ、ヘクサンチドリ、チシマハンショウヅル、コメバツガザクラ、チシマセンブリ、キタアザミ等で飾られている。阿寒屈斜路地帯は日本北部に於ける代表的な火山地形が交錯するところで、山岳群は外貌の変化に富み植物相も亦多種多様である。この多様性は諸山の高度にもよるが他方各火山の爆発年代の

相違によることも明らかである。阿寒湖をはさんで雄阿寒と雌阿寒は近距離であるが、雌阿寒にあるコマクサ、メアカンフスマ、メアカンキンバイ等が雄阿寒には全然見られないのも、その一例である。又アトサヌプリに於けるハイマツ群落の低地発達、西別岳とカムイヌプリのお花畑の相違、更に阿寒火山群と屈斜路火山群との高山植物の生態比較等興味深い自然研究の資料が豊富である。その一例として次にハイマツ群落の発達高度比較表を掲げる。

地区別	山名	山頂標高	生育下限標高
阿寒区	雄阿寒岳	一、五〇三	八〇〇米
阿寒区	雌阿寒岳	一、三七一	一、一〇〇
屈斜路区	藻琴山	一、〇〇〇	八〇〇
屈斜路区	アトサヌプリ	五一〇	二〇〇
西別岳	カムイヌプリ	八五八	八〇〇
西別岳		八〇〇	ナシ

アトサヌプリだけが標高僅か二〇〇米でハイマツの発達をしている特異な状態を示しているが、これは硫黄を含む山体の酸性土壌が他の植生を拒んでハイマツ群落だけを許容しているためである。

阿寒といえど何か太古とアイヌの原始の姿が浮ぶ。阿寒の名はアクワントウ（阿寒湖）のアクワンで動かない（湖）という意味

とも考えられ、ラカンベツ（鹹の産卵する川の意の阿寒川）のテカンがアカンと訛つたものともいわれているが、いずれにせよ阿寒の名をきけば太古ながらの原始境が連想される。事実阿寒はサルヲガセをつけたエゾマツ、トドマツの大木よりなる千古の原始林につゝまれているが、しかしその間に入りこんでいる人文景観にも阿寒獨得の味がある。

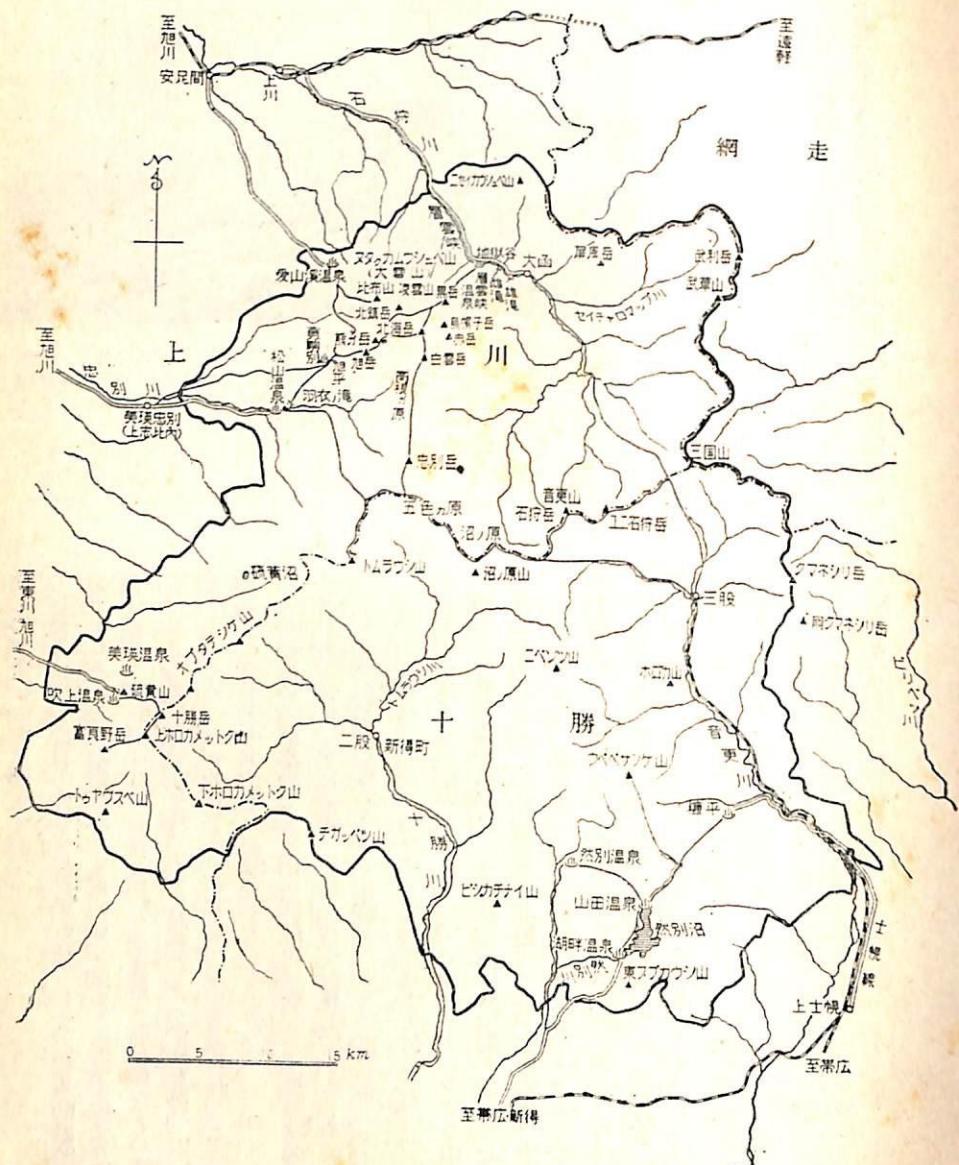
阿寒国立公園の利用拠点は川湯温泉と阿寒湖畔が東西の代表的なものとして挙げられる。川湯温泉はアイヌの人たちはセセクベツとよび「湯の川」という意味であるが、事実川湯温泉を流れる小川はいたるところから温泉が出て文字通り湯の川になつてゐる。近年一部をのこして焼失したが最近では殆んど復旧して利用者を集めている。温泉は非常に強い酸性で泉温六三度、キヅの治療に効果があり、冬期でも湯治客がある。阿寒湖畔は阿寒湖の南岸の温泉街で阿寒湖、雌阿寒等附近利用の最大の拠点である。しかししながら阿寒で最も興味をひくものは矢張りアイヌの人たちである。阿寒湖畔をはじめ、屈斜路湖畔などにも所々にさゝやかな生活をいとなんでいる姿が阿寒の原始林に最もふさわしい人文の添景である。アイヌの人たちが木彫をつくつて思出の土産を売つてゐる姿は独り阿寒に限られるものではないが、阿寒に一番調和した姿の一つである。北海道といえばアイヌと共に熊を思出すのが常であるが、遺憾乍ら自然の熊をながめることは不可能に近い。阿寒でも同様であるが阿寒湖畔に並んだ土産店の前には小さな熊の子たちが、クサリにつながれてたむれでいる。こんな景

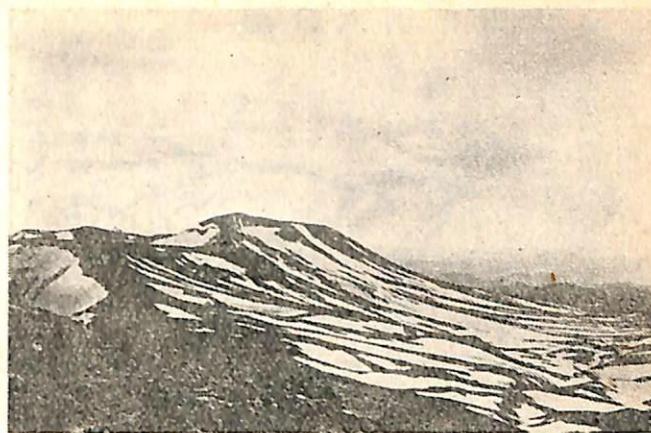
觀も阿寒の思出の中にいつまでもものこる一つであろう。

阿寒は我国の国立公園の中で、一番原始的な国立公園の一つであつて、複雑でしかも特色のあるまとまりをもつ区域内は、今なお豊富な原始林でおおわれているが、しかし太古から人間とのつながりがなかつたわけではない。雌阿寒にも、雄阿寒にも、阿寒湖にも、屈斜路湖にも、摩周の原湖にも、そのほか阿寒国立公園のいたるところに豊かな伝説がこされてゐる。アイヌの人たちが遠い昔から語りつたえたこれらの沢山の伝説は、阿寒の風景が矢張り美しくしかも何か怪しいほどの魅力をもつていたからではなかろうか。尽きぬ伝説を求めてさまようなら科学的な観察と共に阿寒国立公園は更に深い印象を残してくれる。

大雪山国立公園

指定 昭和9(1934)年12月4日
面積 231,929 陌





旭岳の雪田 大雪山は北海道の屋根であり脊骨であるので、標高は 2,300 m に達しないが、緯度の関係で気象環境は中部山岳の 3000 m 級の山に匹敵し、雪融は勿論、氷融の跡も見られる。殊に旭岳にはカールや雪田がよく発達して万年雪が見られる。

この公園を代表する湖水である。

区域の大部分を被る寒地性針葉樹林は、日本の代表的原始林で壯大な山嶺の間には雲の平・高根ヶ原・五色ヶ原等の広大なお花畠が展開し、御鉢平の火口趾、豪壮な層雲峠・勝仙峠などの渓谷、沼ノ平・沼ノ原等の湿原などと共に特色のある景観を誇っている。珍らしいナキウサギをはじめ特有な高山昆虫もみられ、ここは自然研究の対象としてすぐれた要素をもつている。

この公園の主要部分である中央高地は、秩父古生層の基盤の上を流紋岩が被り、更にその上を安山岩が被覆している。その状態は石狩川や忠別川の峡谷でよく観察することが出来る。

この山脈は公園の南方のスキーで有名な十勝岳（二、〇七七メートル）から北東へ延々と長蛇のように走つて、トムラウシ山（二、一四一メートル）から二つに分れ、一つは大雪山火山群となつて北海道の最高峰旭岳（二、二九〇メートル）や北鎮岳（二、二四六メートル）白雲岳（二、二三九メートル）北海岳（二、一六一メートル）黒岳（一、九八四メートル）等を起して、石狩川上流の大峡谷である層雲峠を越え、再び昇起してニセイカウシユベ山（一、八七九メートル）となり、遂に北見峠（区域外）に至るという延長実に百数十軒に及ぶものと、もう一つはトムラウシ山・五色ヶ原から東走し、石狩、十勝の国境を走つて石狩岳（一、九八〇メートル）音更山（一、九三三メートル）ユニ石狩岳（一、七五五メートル）等を連ね、石狩・北見の国境に聳え立つ武利山（一、八七六メートル）武華山（一、七五八メートル）等を経てニセイカウシユベ山である。これ等の山岳を縫うて流れる石狩・十勝・音更の三大河川は北海道の主要河川で、然別火山群に抱かれる堰塞湖然別湖は

今これ等の広大な景観を便宜上火山地帯、構造山地帯、峡谷地帯、湖沼地帯に分けて観察することにする。

火山地帯

この公園の火山活動は第三紀の末か第四紀の始めであるが、その基底である古期岩層や第三紀層を含んだ地層が削剝され、石狩山稜から西方に低くなつた凹凸の多い山地となり、その南西部に先ず十勝岳の噴出が始まつたのである。最初に噴出したのは流紋岩類の熔谷や凝灰岩であつて、これは大雪山地方まで全体を被る基底の山や谷を埋めたのであるが、処によつては四〇〇米の厚さにも達している。層雲峠で見られる柱状節理のものはこれである。その後安山岩の噴出があつたが、これは十勝山脈に発達した十勝岳の高峯部を形成している。

大雪山火山群は比較的扁平なコニード型であるが、頂上部は約六〇〇メートル、中央噴火口は長径二、三糀、短径一糀、深さ二〇〇—二五〇メートルの爆裂型である。その火口底には有毒温泉・ロノ湯の二温泉を湧出しているが、火口を巡る環壁上に中ノ岳・間宮岳・荒井岳・松田岳・北海岳（何れも二、一〇〇メートル級）等の諸峯並びに側火山熊ヶ岳（二、二〇一メートル）がある。この火口の東北外斜面は坦々としたヘヒマツ帯で雲の平と呼ばれ、その末端は黒岳の麓の石室まで拡がつている。北海岳から東北に流れた熔岩流の中軸は桶状に落込み、御食沢と称する高山植物の宝庫になつてゐる。なおこれ等山頂部には夏期も残雪が多く、広大な雪田や雪渓があつて、高山植物の美と共に山岳美を一派引立ててゐる。

北海道の最高峯旭岳は東接する後旭岳と共に双子火山であり、今なお噴煙を続いている標式的なコニードで秀麗な裾野を曳いている。

この火山群の最南峯白雲岳の南には、熔岩台地の高根ヶ原があり、又大噴火口の北側には北鎮・鋸・凌雲・柱月・黒岳等、五つの円頂丘が東西に並んでいる。このうち黒岳の西側柱月岳は側火山であり、その西側に聳える凌雲岳はコニトロイデの二重式火山であるが、單火山状を呈している。

十勝岳は三重式コニードとも云うべき複式火山で大正十五年の有名な爆発以来盛んに活動を続け、昭和二年五月二十三日にも大爆発をした。西側に径一糀の馬蹄形火口があつて、その中に丸山或は硫黄山と呼ばれる中央火口丘がある。

然別火山群の一峰ウベサンケ火山の山頂は、赤く禿げて未だ植生をみず、遠望して火山であることが判る。然別湖周辺のベトウトル山・ヌブカウシ山等は何れもトロイデ型火山である。

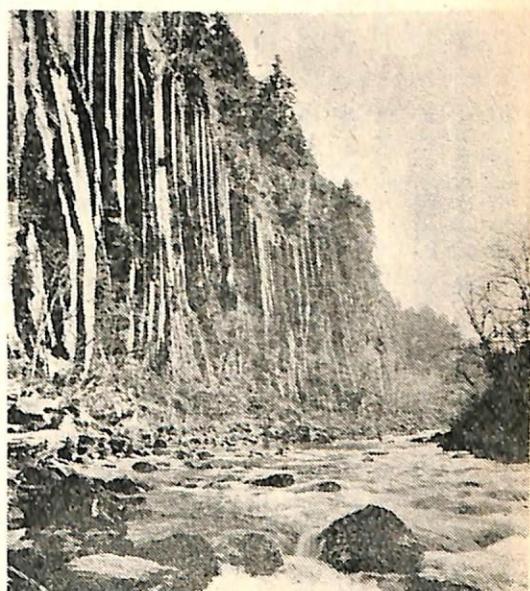
トムラウシ火山は石狩構造山地との接觸地点にあつて、その魁偉は山容と、一大火口中に樽前式のドームがあるので有名であり、忠別岳は、高山植物の絨氈を敷きつめた高根ヶ原の緩斜面で北方の大雪山と結ばれ、南方は石狩山脈と五色ヶ原で結ばれている。

この公園内の温泉をあげると、層雲峠温泉では塩谷温泉（層雲閣）及び登仙閣（無色透明の食塩泉及単純泉七〇度—九三度）国沢（微温、鉄鉱泉）飯田（炭酸冷泉）等湧出個所は二〇以上もある。

り、泉量は豊富である。安足間川上流には愛山溪温泉（無色透明の単純泉、苦味泉、四三度—四七度）があり、忠別川上流には松山温泉（アルカリ泉、四七度—五四度）があつて、附近は層雲峠同様忠別川の清流を挟み安山岩の柱状節理の断崖が発達しているので天人峠と呼ばれている。天人峠温泉から五、五糸旭岳へ向つた旭平（一、〇五〇米）には勇駒別温泉（清澄、水量豊富）がある。十勝岳中腹（標高約一、〇〇〇米）には吹上温泉（酸性泉、四三度）があつて優れた眺望を見せている。南東部の然別湖周辺には湖畔温泉（弱食塩泉、四五度）や山田温泉（清澄な単純泉、四三度）、然別温泉（本郷温泉・食塩泉、六八度）、等があるがその中、然別温泉は最も奥にある原始的な温泉である。又音更川の支流ヌカビラ川には糠平温泉（清澄な単純泉、食塩泉、四〇度—六〇度）があり、左岸のニウレナイ沢にはニウンナイ温泉（長沢温泉・弱食塩泉、六〇度）がある。

石狩山稜のユニ石狩岳・音更山・石狩岳や更にその南のニペソツ山（二、〇一三メートル）等は火山でなく、古生層の構造山地であるが、この国立公園の中央部に位しているので山頂の眺望は頗る雄大で、最も原始性に富んでいるから、深山のインスピレーションは北海道第一と称せられている。

峡谷地帯



層雲峠の柱状節理 石狩川の上流が大雪山群と屏風岳やニセイカウシユベ山との間を流れる地帯は、大部分両岸が流紋岩（石英粗面岩）から成り、柱状節理が発達した絶壁で、所謂奇峰奇岩が簇立している。中には150 m. 以上の大岩壁も屹立していて、大函・小函・銀河の滝・流星の滝等名勝、奇勝が連続している。

勝仙峠は忠別川の上流で、美瑛忠別の東端、燕岩の絶壁から、

この公園には天下の絶景二天峡谷がある。一つは層雲峠、もう一つは勝仙峠である。層雲峠は大雪山火山群と、北方屏風岳、ニセイカウシユベ山連峯との間にあつて石狩川を挟んでいる。柱状節理を示す流紋岩から成る大絶壁には、銀河・流星等大小多くの瀑布がかかり、両岸にはトドマツ・エゾマツ・ヤマザクラ・ツツジ・ナナカマド・カエデ等が多いので四季夫々の眺めが美しい。大函・小函の上流はひらけて奥山盆地となり、遠く石狩岳の麓までつづく鬱蒼たる針葉樹の大原始林地帯である。

松山温泉の上流約二糠の処まで、層雲峠と同様流紋岩の柱状節理の絶壁で、懸崖の壯麗と飛瀑の美とは層雲峠に劣らぬ絶景である。殊に羽衣の滝は北海道第一の大瀑布（約三〇メートル）である。

湖沼地帯

又この公園には多くの湖沼がある。沼の原は石狩岳とトムラウシ火山との間、石狩川と十勝川の分水嶺に近い高度一、四〇〇米内外の盆地でここに大小二千余の浅い湖沼が集まっている。そのうちには直径二糠に及ぶものもある。このあたり一帯は高山的に侵性となつたエゾマツが生えて居り、高山植物の豊富な幽境である。

然別湖は東西ヌブカウシヌブリ・ベトウトルヌブリ等の山によつて囲まれた堰塞湖で周囲約一二糠、面積三五〇陌、湖面は海拔七九七メートル、北海道の大きな湖沼中では最高位にあり、最深部は九九メートルである。湖岸線は複雑で数多の岬角が湖中に突出し、水際の岸壁は象牙細工の様に美しく刻まれている。もの凄い程美しい緑色の水面に周囲のエゾ・トドの針葉樹や、白樺・ナナカマド等の広葉樹をまざた原始林がその姿をうつじ、多数の岩魚が泳ぐ様は全く魅力的である。北方に聳えるウペベサンケヌブリ（一、八七〇メートル）や、ベトウトルヌブリの山々から発する溪流は皆ここに集り、南方から然別川となつて流出する。

この公園は植物生態の上から見ると、我國としては最も北に偏し、標高も二、〇〇〇メートル内外であるから、寒生植物の群落を有す

ることになるが、山上は丁度アラスカや、カムチャツカの植物景観に似たところが多い上に、北海道特有の植物が沢山ある点で貴重である。この地帯の垂直分布は次のようである。

針葉樹帯（六〇〇メートル～一、四〇〇メートル）アカトドマツ・アカエゾマツ・エゾマツ等が主で、それに九〇〇メートルあたりまでミズナラ・オヒヨウニレ・ナナカマド・イタヤカエデ・ヤマザクラ等を混じ、一、二〇〇メートルあたりではダケカンバを混えている。

ダケカンバ帯（一、三〇〇メートル～一、六〇〇メートル）この地帯はエゾノダケカンバ・アツヘダカンバ、その下木としてナナカマド・シロバナシャクナゲ・ハイマツ等を混じている。このあたりになると林木は次第に粗林となり、寒地性植物帶線に移つて行く。

ハイマツ帯（一、五〇〇メートル～一、八〇〇メートル）小灌木草本帯（一、七九〇メートル～山頂まで）このあたりはもう高山植物帯で寒地性の植物が群生しているが、火山の新旧によつてその種類を異にしている。この地帯こそは、御花畠として最も珍重されるところであるが、ここでは融雪時期が遅く、又初雪が早いので、開花、結実期間が非常に短いから、各種の花と実とを同時に見られるのが特色である。この地帯中最も種類の豊富な処は、火山成生の古いといわれる平ヶ岳、小泉岳方面で、次は黒岳や白雲岳・北鎮岳方面の裾合や凹地である。溪間、沼沢等に雪の融けた跡から跡へと開花して行く美しさは、驚くばかりである。

北海道の野生動物と云えば、第一に熊であるが、この公園地帯が、絶好の棲家であることは勿論で、相当数生棲しているものと

考えられる。

大雪山の動物で特記すべきは天然記念物のナキウサギである。これは齧歯目の蹄兔科の一種で、アナウサギより小形である。耳は小さく、前肢後肢同長で、瞼部には毛があり、尻尾はほとんどなく、特殊な鳴声を出す。これは世界でも分布が限られ、ヒマラヤ山脈や蒙古・カムチャツカ・北美等だけで非常に珍貴なものである。

高山蝶には大雪山特有のダイセツタカネヒカゲ・アサヒヒヨウモン・ウスバキチヨウ等を産する。

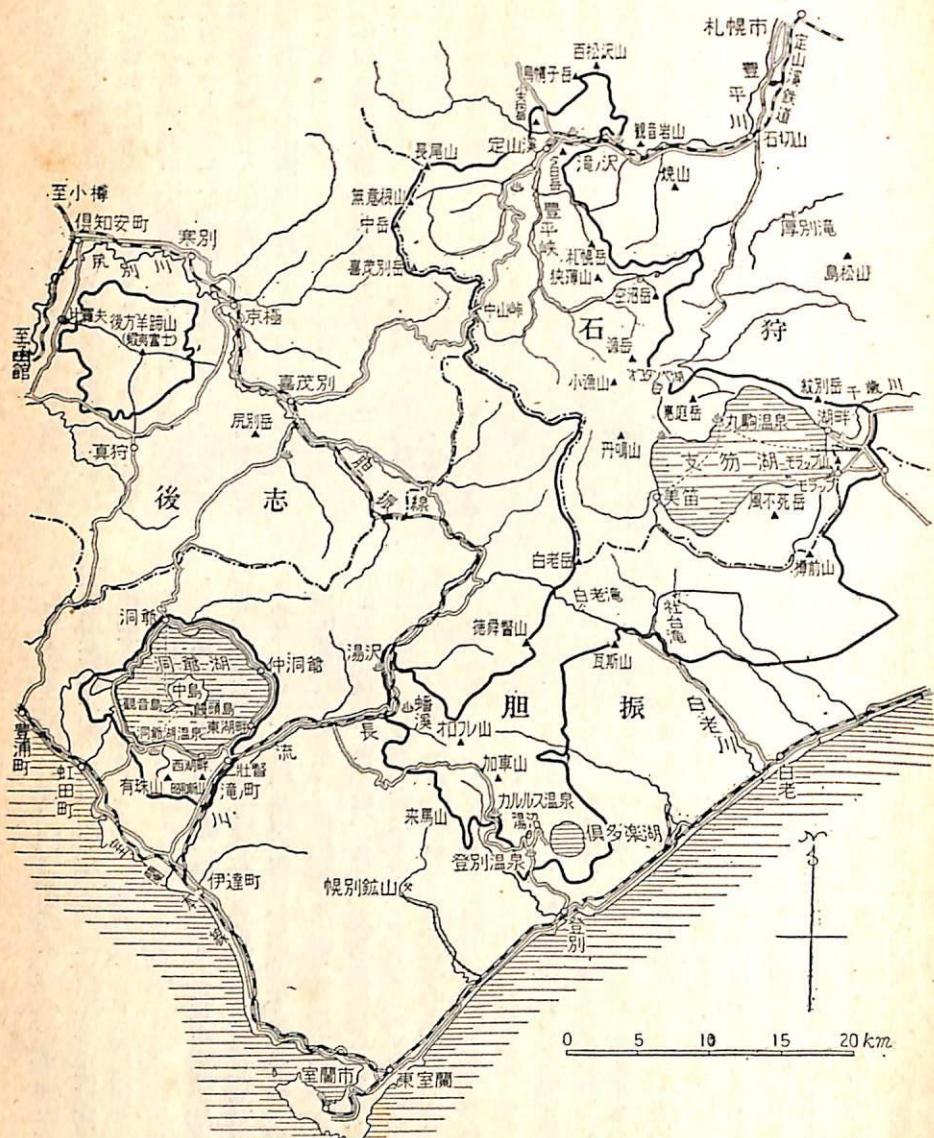
大昔からアイヌの人たちは大雪山をヌタクカムウシッペとよんだ。ヌタクといふのは「高原」、カムは「神秘」とか「不可思議」とかの意味でウシッペは「湿地の河」という意味といわれる。いつ頃のことか、太古の話であろうがアイヌの人たちが熊を追つてもあろうか大雪山に登つて、雲の去來する神秘な高原に沼や湿地があり水が流れている美しい世界を知つての命名であろう。そこは恐らく今の高根ヶ原か五色ヶ原の広大な寒原台地であつかも知れない。

大雪山は最高の旭岳でさえ二二九〇米にすぎないが、しかし北海道の屋根をつくるこの一帯は、何か人跡未踏の秘境のような感覺をのこしている。事実広大な大雪山国立公園の中央部は殆んど人文景観を織りこんでいない一大原始林である。漸く国立公園の四方の麓に湧く温泉を利用の拠点としているにすぎない。

層雲峽温泉、愛山溪温泉、勇駒別温泉、松山温泉、吹上温泉、糠平温泉などがある。これらの温泉も開発の歴史は内地と比較すると極めて新しい。層雲峽温泉の発見は安政年間のこととされるが、温泉に着目されたのは明治初期からで、その開発は大正四年以来のことである。愛山溪温泉の発見は遅く明治三五年であり、松山温泉も明治三四年の発見であり、吹上温泉も明治三五年の発見、糠平温泉も大正一三年にはじめて宿舎が開かれたにすぎない。

支笏洞爺国立公園

指定 昭和 24 (1949) 年 5 月 16 日
面積 98,660 陌



この国立公園は石狩の国と胆振の国に跨つてゐる。区域の大部分は所謂那須火山帯が北海道南西端にある渡島半島の駒ヶ岳から噴火湾を横ぎつて北上した北端に相当するもので、総称して後志火山群と呼ばれている。この中には樽前山・有珠岳のような活火山を始め、標式的コニーデである羊蹄山の他多数の火山及び支笏湖・洞爺湖・俱多楽湖等のよだれな代表的火山性陥没湖があり、更にその間に登別・洞爺・定山渓等豊富な温泉が湧出して火山的景観を豊かにしている。

これ等の地貌を飾る植物景観は地方的に異り、定山渓と洞爺附近は針広混交林、支笏湖を中心としては針葉樹林と広葉樹林、登別附近は大体広葉樹林である。その中支笏湖を中心とするエゾマツ林の発達は日本では他に類例を見られないものであり、その湖畔の植生は火山活動と森林との関係を興味深く物語つている。又羊蹄山は單体火山としてこの地方では最も樹種に富み且つ森林の垂直分布も典型的で觀察に適するが、御花畠もよく発達している。

この地帯の森林には北海道の山岳動物であるヒグマ・エゾリス・テン・エゾイタチなどがまだ相当多く棲息している。平原に近い山地にはシマリスが棲み、エゾヤマドリも多く、特に夏期は各種の小禽類が渡来する。森林動物の豊富な点では道南随一であり、

洞爺湖の水面と定山渓附近は水禽の憩い場で禁猟地となつてゐる。洞爺湖の一帯は北海道としては最も気候温暖な地方で、冬期南方に渡らずにとどまる鳥があつて、保護が徹底すれば水禽の名所となり得る。

この公園の自然景観は、(一)定山渓附近、(二)支笏湖附近、(三)登別温泉附近、(四)洞爺湖附近、(五)羊蹄山附近の五箇所に分けて觀察することが出来る。

定山渓附近

この溪谷は札幌の南西約二四糠ばかりの豊平川流域に沿うV字型谷であるが、定山渓附近は石英粗面岩・安山岩及び集塊岩等から成り、温泉は石英粗面岩の割目から湧出する単純泉である。

定山渓から炭酸泉へ、更に豊平川上流へかけての豊平峠は、概ね針広混交林で、溪谷沿いは地形急峻の関係から大体原始状態を保つてゐる。針葉樹の主なものはトドマツとエゾマツで奥に入ればエゾマツの方が多い所もある。又岩石地にはアカエゾマツがあり、時にイチイを混じてゐる。広葉樹としてはケヤマハンノキ・シラカンバ・ヘルニレ・オヒヨウ・カツラ・シウリ・ヤチダエ等がある。水流の畔にはオニシモツケ・ヨブスマソウ等を生ずることがあり、岩地を除いた林地は一般に雑類に占められているが、春から初夏の日には、シラネアオイ・スミレサイン・ミヤマエンレイソウ等が咲く。炭酸泉附近の岩地はチャボカラマツ・エゾハナシノブ・マルバキンレイカ等を産する。

支笏湖附近

後志火山地帯の東端の部分であるが、西側は古い火山の丹鳴山(一、〇四〇米)白老山(九四五メートル)徳舜別山(一、三二二メートル)オロフレ山(一、二三〇メートル)等が北から南へならび、火山高原地帯を拡げてゐる。東側も標高の低い古い火山があるが緩傾斜で石

狩の低地帯に続いている。

支笏湖は火山性陥没湖で、カルデラの最大径は東西一五糠、最

小径は南北一三糠で略円形であるが、その中の湖自体は恵庭・風

不死両火山の形成によつて長

径一三糠短径五糠のマニ型となつてゐる。

湖面は標高二四八米、深度は三六三米である

から、その湖底は海面下一五米の所にある。

従つて附近の後志山地の平均高度に比べ

て少くとも六〇〇米の陥没を

したことになる。湖岸は急傾斜となり周囲約四一糠、面積

七六一八畝である。水色はフ

オーレル比色計三号の藍色湖

で、透明度は二五米我が国第

五位で、周辺は原始的景観を

呈し、日本最北の不凍結湖と

して名高い。

又、支笏カルデラ内壁の溪

流が恵庭火山の噴出によつて堰止められて出来たオコタンベ湖は海拔五七二米で湖面は支笏湖より更に三二四メートルも高い。湖はエゾ・トドの原始林の中に眠つており、道がないので訪づれる人も

ない原始湖である。

支笏湖を中心とする山岳地帯は成生年代及火山活動を異にしているので、植生にそれぞれの特徴を示すが森林帯は特に植生の変化が著しい。従つてこれ等の植

生は山岳の地貌と共に觀察する

ことが必要である。

恵庭岳（一三二〇メートル）と風不

死岳とは共に支笏カルデラ内に生じた急峻なコニードで、前者

は輝石安山岩の熔岩を主とし、

火山碎屑物は極めて少いが、後

者は輝石安山岩のほかに含石英

角閃石複輝石安山岩の熔岩及火

山碎屑物から出来ている。両者

共カルデラ成生後樽前火山成生

前の略同時期に生れたもので、

恵庭は頂上部に東向の大火口と

東方へ延長した割目があつてそ

の中に噴氣孔が數ヶ所ある。風

不死は全く死滅し侵食が進んで

いる為に火口らしいものは見られない。森林分布は両者共南北の

面で分布が異なつてゐる。恵庭では七〇〇メートル以下の南西面がダケ

カンバ・ミズナラ帶であり、アサダ・エゾイタヤを混生しており、



支笏湖と風不死・樽前両火山 湖上から南西を眺めると、臨遠な水面に、樽前山（左）と風不死岳（右）との影が写る。風不死岳は現在は全く死んでしまった。樽前山は成生前に出来たもので、現在は東やで扁平なコニードで明治42年（1909）の大爆発で崩壊した。樽前山は成生前に出来たもので、現在は東やで扁平なコニードで明治42年（1909）の大爆発で崩壊した。樽前山は成生前に出来たもので、現在は東やで扁平なコニードで明治42年（1909）の大爆発で崩壊した。

僅か尾根筋にエゾマツが見られ、部分的にトドマツが生じているに対し、北面はオコタンベ川側が針広混交、ボロビナイ側がエゾマツ・トドマツ林であつて、ダケカンバはオコタンベ側は九〇〇米、ボロビナイ側は八〇〇米以上に、ハイマツは山頂附近にだけ生育する。風不死では六〇〇米以下は北面が尾根上にエゾマツ・ダケカンバ、下部にトドマツ、ウダイイカンバを生じ、カツラ・エゾマザクラを混生しているに対し、南面は樽前山に接し山腹が狭く殆どダケカンバに占められている。

樽前山（一〇二四メートル）は主として複輝石安山岩の熔岩及びその碎屑物から成る扁平な層状火山であるが、頂上の中央火口の中に明治四二年（一九〇九）の大爆発後生じた円頂丘がある。これは最大径四五〇メートル高さ一〇〇メートル、体積二千万立方米と測定され、西印度諸島のモンブランのベロニーテと比べられる世界的のものである。この円頂丘にはその後割目が出来て今なお噴煙をあげている。ここでは森林の発達が噴出物の東偏性とも関連してその状態に差異が見られる。標高六〇〇メートル以上が無樹帯であり、五〇〇メートルまでがミヤマヘンノキ、五〇〇メートルまでがミヤマヘンノキとエゾマツとの混交、東側では特にアカエゾマツが発達し、四〇〇メートル以上が無樹帯である。エゾマツ純林地帯がある。一〇〇メートルまでが針広混交、それ以下はミズナラ・サワシバ等の広葉樹帯となる。従つて地質と森林との相関関係は恵庭岳噴出物で支笏湖熔岩地帯及び風不死岳噴出物で支笏湖泥流地帯となつた所は針広混交林が発達し、樽前火山

岩層、支笏浮石層やオコタンベ火山岩層には針葉樹林が発達していることが判る。

北海道では天然のヒメマスは阿寒湖と北見のチミケップ湖だけに産したが、阿寒から移入された支笏湖では洞爺湖と共に原産地を凌ぐ程多數棲息して居り、登別のクッタラ湖にも若干産する。

登別温泉附近

登別温泉はクッタラ火山の西麓にある地獄谷・大湯沼及びその附近の硫氣孔・噴氣孔等から噴出する瓦斯や高温の温泉を泉源とする。地獄谷は長径約四五〇メートルで西に開いた爆裂火口中にあり、南壁の鍬ヶ峯は高さ一五〇メートルの急崖となつていて、この谷の中に各種の高温泉が湧出し、ここほど多種の泉質の温泉が同一地帯に湧出することは欧米にも類例がない、中には一時的に間歇泉の性質を示すものもある。湧出量も一秒間約四二立に及ぶことがある。地獄谷附近の岩石は輝石安山岩の熔岩及びこれに関係ある集塊岩質凝灰岩から成つていて、温泉及びガスの影響によつて分解し、粗雑な褐色又は黄白色の岩石となり、附近的風景に色調の奇觀を見せていく。地獄谷の北方にある大湯沼も日和山の南麓に存する爆裂火口で、その底部には黄白に濁つた湯をたたえている。沼の長径は三〇〇メートル、短径は二〇〇メートルで、湯の中には硫黄を熔融しており、沼の表面は温度攝氏四〇度乃至五〇度であるが、深い所は八〇—九〇度で最下部の熔融硫黄の多い部分では一三〇度に達している。基底部にガスが蓄積する時は往々爆発を起し、一時的に全湯沼が黒濁となることがある。